



伊賀市の分散型宿泊ホテル「NIPPONIA HOTEL 伊賀上野 城下町」

## REPORT 2

# 「まちやど」から考える 観光と住民文化

コロナ禍で、遠距離移動や密を回避する行動様式が浸透したことで、観光のスタイルも大きく変化している。旅行者のスタイルの変化に伴い、観光を通じたまちづくりを目指す地域の取り組みも多様化している。本稿では、近年注目される「まちやど」のコンセプトを中心に、観光を通じたまちづくりと住民文化との関係を考察する。

### 1 観光業における外部環境

2020年から始まった新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、観光業は大きな影響を受けている。特に、国境を跨ぐ移動制約が大きく、コロナ禍以前に増加していた外国人旅行客数は大きく減少した。

一方で、近隣を周遊する観光スタイルなど、身近な地域の魅力を「掘り下げる」アプローチが注目されている。この変化は、「観光」を「スポット(点)」で捉える視点から、「エリア(面)」で捉えることへの関心の高まりとも考えられる。

### 2 観光スタイルの変化

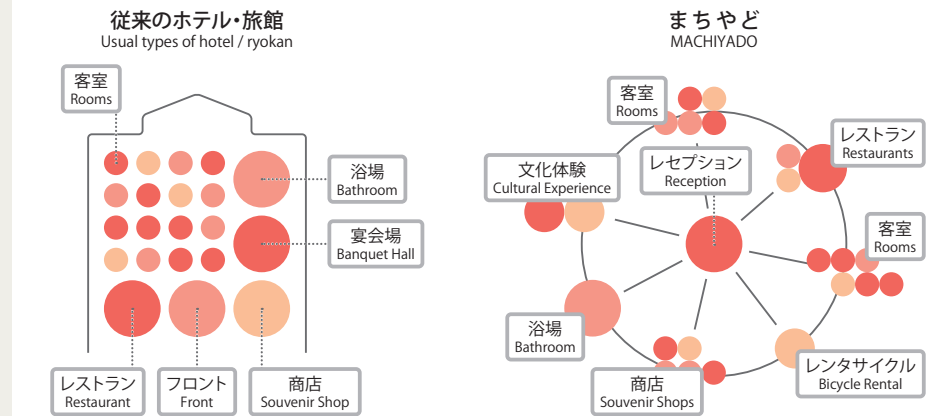
バブル期には、リゾート開発を中心に大規模な設備投資を伴う観光振興策が展開され、保養や休

養を目的とする観光スタイルが主流であった。しかし、近年、個人の志向が多様化することで、新しい観光スタイルとして「オルタナティブ・ツーリズム」の定着が進んでいる。

「オルタナティブ・ツーリズム」は「着地型観光」とも言われ、地域での体験やふれあいを重視する観光スタイルである。必ずしも「有名観光地」ではない地方都市や中山間地域で、旅行者と地域との深い交流が志向されている点にも特徴がある。このような観光スタイルの目的は、国宝級の文化財や大規模なリゾート施設ではなく、地域の生活臭が漂い、その地域独自の気候や風土の中で育まれたライフスタイルに包まれた交流や体験にある。

このように、「地域らしさ」を観光資源として積極的に活用する動きを後押しする施策として、近年「まちやど」という取り組みが注目を集めている。

### まちやどの図



出所：一般社団法人日本まちやど協会「まちやどとは?」 <http://machi-yado.jp/about-machi-yado/> (2022年2月10日アクセス)

### 3 「まちやど」とは

一般社団法人日本まちやど協会(2017年6月設立、以下：まちやど協会)による「まちやど」の定義は「まちを一つの宿と見立て宿泊施設と地域の日常をネットワークさせ、まちぐるみで宿泊客をもてなすことで地域価値を向上していく事業」とされている。すなわち、地域エリア内の空き家を改修した「客室」「浴場」「宴会場」などの機能を分散させて、地域一体となって観光サービスを提供するしくみと言える。従来型のホテルが「垂直的」な

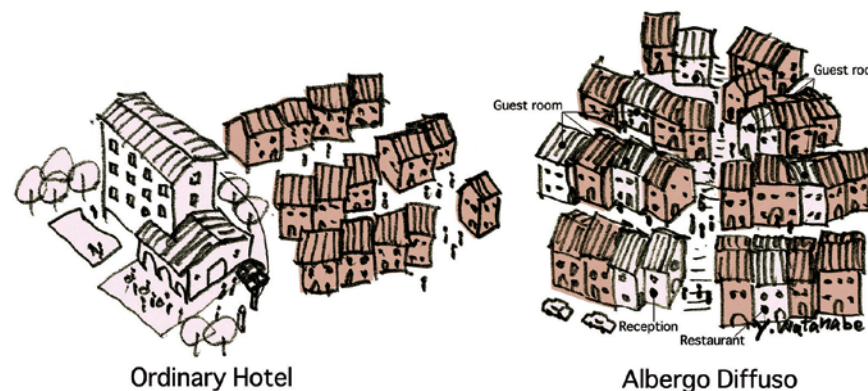
ビルに「宿泊」「飲食」「遊興」などの機能を集約したものであるとすると、「まちやど」は様々な機能を地域内に「水平的」に散りばめたものと言える。

### 4 「まちやど」の発祥

「まちやど」のコンセプトは、イタリアで生まれた「アルベルゴ・ディフーゾ」が発祥であるとされている。「アルベルゴ・ディフーゾ」とは、イタリア語で「分散したホテル(アルベルゴ=宿、ディフーゾ=分散)」という意味である。

1976年に北イタリアのフリウリ地方で発生した

### アルベルゴ・ディフーゾの図



出所：日本大学生産工学部「イタリアの民泊による集落再生—アルベルゴ・ディフーゾ」 <http://www.arch.cit.nihon-u.ac.jp/column/2018/12/18/001505.html> (2022年2月10日アクセス)



大地震の影響で、廃村の危機に迫り込まれていた集落の復興プロジェクトの中から生まれた考え方であると言われている。活動のコンセプトが共感を呼び、その後の取り組みが普及し、06年にはアルベルゴ・ディフーズ協会が設立された。19年時点で同協会に認定されている施設はイタリアで100地域ほど存在し、認定外の地域を含めると、同種の取り組みは世界中で増えているという。

## 5 「まちやど」の事例

2022年1月時点で、まちやど協会に登録されている「まちやど」は、全国18都道府県に23カ所ある。ただし、登録の無い施設であっても、分散型ホテルの形態で地域内の周遊を促進している事例は存在する。本稿では、まちやど協会に登録された「狭義のまちやど」のみならず、アルベルゴ・ディフーズの発想を組み入れた取り組み全般を「広義のまちやど」と捉え、県内事例を紹介する。

## 6 伊賀市の事例

2020年11月、伊賀市で「NIPPONIA HOTEL 伊賀上野 城下町」が開業した。開業以降、伊賀上野の歴史や食文化を発信するホテルとして人気を博している。同ホテルは、城下町の歴史ある建物をリノベーションした「フロント棟」「宿泊棟」合わせて3棟が市内に点在している。フロント棟として活用されている建物は、江戸時代から続くもので、かつては生薬問屋や料理旅館として使用されていた。その後、伊賀市による生涯学習施設としての運用を経て、19年よりホテルとして改修計画がス



宿泊棟である「KOURAI棟」

タート、20年の開業に至る。

同事例は、伊賀市による古民家を活用した観光まちづくりに向けた「伊賀上野城下町ホテル(正式名称：古民家等再生活用事業)」として運営されている。推進にあたっては、伊賀市と民間事業者を合わせた4者での業務連携協定が締結され、官民連携による体制が構築されている。

## 7 鳥羽市の事例

「まちやど」や「アルベルゴ・ディフーズ」の考え方は、観光客を一つの宿泊施設で抱えず、地域への周遊性を高めようとする「泊食分離<sup>\*1</sup>」にも近い。

鳥羽市の相模地区では、地域DMO<sup>\*2</sup>である「一般社団法人 相模海女文化運営協議会」が主導して地域内の事業者が一体となり、泊食分離をきっかけに観光客の周遊性を高め、滞在時間の増加やエリア内の消費を増やすことを目指し、その方法等が検討されている。

足元の構想として、古民家をリノベーションした食事を提供しない宿の運営や、地域内へのセントラルダイニングの設置が検討されており、地域に無いものを共有しながら補い、有るものの強みを活かすことが目指されている。

また、滞在時間の増加に向けては地域内のコンテンツを充実することが必要であるが、相模地区では、「漁港付近を歩く」といった体験や「海女文化が現存するまち」といった既存の施設・文化などの資源に光をあてながら、関係者が一体となっ



鳥羽市の様子

出所：一般社団法人相模海女文化運営協議会「電動キックボードレンタルサービス」<https://osatsu.org/0032r/>(2022年2月10日アクセス)

て魅力ある体験設計の議論が進められている。具体的な取り組みとして、21年12月からは電動キックボードのレンタルを開始している。アクティビティの充実、話題性の向上に加え、地域の文化体験をよりストレスフリーに提供するための施策であると言える。

<sup>\*1</sup> 宿泊者が宿泊施設に泊まる際、宿泊施設で食事せず、近隣の飲食店を利用する宿泊様式

<sup>\*2</sup> 「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役として、地域と協同して観光地域づくりを行う法人。統制するエリアの範囲に応じて「広域連携DMO」「地域連携DMO」「地域DMO」に区分される。

## 8 「まちやど」の考察

「まちやど」や「アルベルゴ・ディフーズ」に通底する価値観は、地域づくりに向けて、外部資本の誘致や一過性の起爆剤に頼るのではなく、既存の資源に光をあてることに重きを置いている。地域に既に存在している「建物」「文化」「歴史」そして「人」など、日常的生活の中にある資源に光を当て、魅力を再考し、積極的に観光資源化しようとする営みと言える。

土地ごとの「住民文化」が、地域の魅力に作用するならば、その存続可能性を考えることも重要だろう。「まちやど」による観光まちづくりを通じて、着地型観光の市場が活性化することは歓迎すべきことであるが、その成果を本物とするためには、同時に「住民文化」の持続可能性を検討することが必要である。

近年の地方での生活は、スマートフォンの普及、大規模ショッピングモールの立地、ファストファッションの定番化などにより、ライフスタイルの同質化が進んでいると感じる。地域の「住民文化」の個性が見えづらくなっている状況は、「まちやど」や「アルベルゴ・ディフーズ」が目指す方向性とは整合せず、分散型ホテルを整備したとしても、目指す価値が十分に発揮されない可能性がある。

「まちやど」という取り組みを通じて、「住民文化」という地域資源から価値を発揮していくためには、その文化が育まれる土壌の整備が必要である。そのためには、住民自らがその土地に根付く「古き良き文化」を認知し、現代的なライフスタ

ルに組み込みながら、愛着を持って育み、語り継ぐことも重要であろう。具体的には、住民同士の交流を促し、歴史や文化について学び、語る機会が増えることが望まれる。つまり、「まちやど」とは、旅行者に対して「観光地の魅力を訴求する」コンテンツである一方で、住民にとっては自分達の「居住地の魅力を発掘する」ツールとして機能しうるのである。

鳥羽市の事例にも象徴されるように、エリア内の周遊性の向上や、滞在時間の増加を図るには、エリアが魅力的でなくてはならない。そのため、地域内の関係者が一体となって、あたりまえに存在する施設や文化を魅力的なものとして掘り起こす取り組みが行われている。これは、「観光」をきっかけに、地域内の対話が生まれ、自地域の魅力が認識され、研磨されていることに他ならない。つまり、「魅力的な地域が観光で成功する」という順序ではなく、観光をきっかけに「住民が自分のまちの魅力を知り、自分のまちが好きになる。誇りに思う。」という変化をもたらしている。

## 9 まとめ

今後、地域住民の生活環境を維持していくためには、エリアの稼ぐ力の向上が必要とされ、観光振興は重要な施策に位置付けられている。

前述した通り、「まちやど」の取り組みは、旅行者だけに関わるものではない。生活文化に入り込む観光スタイルの定着は、住民自身による地域の魅力の形成への貢献領域を増やすことにつながる。だからこそ、住民自らが他と差別化できる「自分達のライフスタイル」を認識することが必要となるのである。その結果、「観光」は地域活性化のための「稼ぐ手段」のみならず、地域住民の「生活への愛着を育む手段」として機能することになるだろう。「地域への愛着」をきっかけに観光資源が育まれる構造を理解することで、居住地や観光地としての地域の価値は高まるはずだ。愛すべき地域の多様性を存続させるために、他ならぬ住民の役割に期待したい。(中村 哲史)